書評

増谷文雄著 仏教とキリスト教の比較研究

岡邦俊

著者は宗教学を専攻し、今日まで多くの著書をものし、その労作は学界でも高く評価されている。ここに紹介する本書も学界における名著の一つである。本書はすでにその英訳版も刊行され、欧米にあっても貴重な資料として広く利用されている。

思ふに、一つの宗教を充全に理解することさへも容易ならぬことであるが、二つの宗教を比較研究する―その類似を結合し反対を分つ―と云ふことは極はめて困難な仕事である。

著者はこの困難な仕事を本書において立派になしとげているように思ふ。

仏教とキリスト教は謂はば世界の代表的二大宗教であり、民族と国境を越へて人類文化の二大源泉ともなって、永く幾億の人心の糧となり光明となってきた宗教である。この二つの宗教を比較研究することは、学問的にも実際的にも極はめて意義の深いものである。

本書はまことに用意周到にして而も公平なる学問的立場からキリスト教と仏教の類似と相異を明確にしているが、仏教徒にとってもキリスト教徒にとっても相互理解のために重要な役割りを果すものであろう。もとより仏教とキリスト教とは、宗教としての共通の基盤に立ちながらも、その教義信条と実践においては決して同一のものではない。このような共通の類似と根本の相異を明確にしてくれたものが実に本書なのである。

本書の内容は四編よりなっているが、何れもその表現は現代的であり、而も、キリスト教と仏教との何れにも共通する課題をとりあげて論じている。第一編は「人間論」となっているが、それには、この二つの宗教は「私はいかなる人間であるか」との問いに対して、いかに教えるであろうか、との副題がつけられている。「理性の言葉をもって聴く者の理性に語りかける」「理性的人間の立場」と云ふ「理性の道」が仏教の人間論の中心をなしている。それに反して、「権威あるものの如く命ずる」「感情に対して訴へる」「権威あるものの前にれひ伏す」態度がキリスト教の人間論の中心をなすとされている。尚、本編は一章「人間の主体的省察」、二章三章「二つの人間解釈」(1)(2)となっている。

第二編は「幸福論」で、これには、この二つの宗教は「私は何を願うことができるか」との問いについて、いかに教えるであろうか、との副題がつけられている。二つの宗教は共に「世俗のよろこびを捨て、世俗のむなしさに打ち勝つ」て真実の幸福を追求するものである。併し、その追求の仕方は両者は決して同一ではない。現性の道によって、普遍的真理を体験し、自己啓培による人生苦からの自由と解放、自律的自我の完成は仏教の教えである。自らを灯明とし、法、真理を灯明とし依り処として理想の「解脱」「涅槃」を実現しようとするのが仏教である。キリスト教は、神の愛によって「地上における罪と死とから救はれ、天国に於ける永遠の生命」のかく得、「造られし者の虚無」「神は全、我は無」の立場で真実の幸福を求めようとするものである。本編は四章「幸福への道」、五章「解脱と救済」、六章「解脱への道」、七章「救済への道」となっている。

第三編は「信仰論」であるが、これには、この二つの宗教は「私は何に依ることができるか」との問いについて、いかに教えるであるかとの問いについて、いかに教えるであろうか、と副題されている。著者はここで先ず、信仰の二つの型として「解信」と「仰信」について述べている。「教えをききそれを理解して決定回心して、もはやこの教えをおきて他に依ることなしとする」を解信となし、「一箇の人格を仰いでもっぱらそれに依り頼む、絶対憑依の態度」を仰信となし仏教は前者の道であり、キリスト教は後者の道であると論じている。この意味において仏教はあくまでも「知慧」の宗教であり、キリスト教は「信仰」の宗教であるとも論じている。著者はここで又、キリスト教と一見して極はめて類似する信仰を持つ、浄土門の仏教とを比較しているが、極はめて興味ある論述である。神、祈り、救いの信仰を本来持たなかった仏教の中に、「アミダ仏の慈悲を信仰す

ることによって救はれる」との、浄土門の仏教はいかにして発生したであろうか。自己啓培による解脱の道を説く仏教と、神の創造と支配の信仰による救済の道を説く、キリスト教との特異性は対照的である。この特異性の中で、浄土仏教とキリスト教との類似性についても著者は適切な解明をなしている。本編は八章九章「仏教における信（1）（2）、十章十一章「キリスト教における信仰（1）（2）、十二章から十四章に亘って「キリスト教における信仰と浄土門における信仰について」（1）（2）（3）となっている。

第四編は「実践論」であり、ここにも、この二つの宗教は「私は何を為すべきであるか」との問いにつき、いかに教えるであろうか、と副題がつけられている。この問いへの解明として、十五章十六章「宗教的実践と世間的道徳（1）（2）十七章「慈悲と愛について」、十八章「汝をして人と異ならしむるものは何ぞ」が、それぞそ論ぜられている。ここでも著者は、キリスト教と仏教との類似と相異とを明確に論じている。特に筆者は、「慈悲と愛について」は教えられるところが多かった。

（東京青山書院発行、菊版三〇八頁、定価三五〇円）

Theories of Education

An Introduction to the Foundetions of Education
Harper & Row, publishers, N. Y., 1963 521 pp $ 6.50
by John P. Wynne, Ph. D., (co lumbia uni).

教育学における諸学

― 教育学の基礎入門書 ―

荒井貞雄

著者、ワイネ博士は、かっては公立学校の教師、校長であったが、のちにVirginia の小さな Longwood 大学の哲学、教育学科の長を三〇年以上つとめた人で、現在は名誉教授である。この間、全米または東部地域の哲学、教育学会で広く活躍した学究の徒でもあり、また実践家でもあった。一九四七年にPrentice-Hall から刊行された「教育哲学」を含めて九冊の教育書がある。いづれも斯界では非常に高く評価されている労作である。

この本は E. E. Bayles が編者となって出している Harper's Series on Teaching の一冊である。著者はその序文で、各章ごとに妥当な学者の検閲を乞い、その助言を快くうけ、慎重にその正確さと実践性とを期したと述べ、多くの学者をあげて、謝意を表している。その内容を吟味してみると著者の言葉の真実性がよく理解できる。

著者は二つのはっきりした目的を堅持して全体をすすめている。その一つは先哲によって展開された多くの教育学説が、現代誤って解釈されているので、その問題点を明確にすること。他の一つは、最近、教育学の基礎、例えば、教育史、心理学、哲学、社会学的基盤等、に対する自然科学者群の圧迫、論議、挑戦に関連しての応答、対処である。

第一の目的を果すために、著者は極めて忠実に、各々の学説提唱者の素材について克明に再吟味を試みる、と同時に、最近のその学説についての研究結果の分析を科学的に進めている。第二の目的のためには、多くの学説を、なかば、歴史的順に整え、哲学的心理学的基礎、実践的関連性、および、文化教養的背景の立場からの分析を試みている。

各章四節からなり、その一、二節では、主として学説そのものを扱い、その三節では歴史上からみた文化的評価、その四節においては結論的注解を、注意深く試みている。章の終りにその学説提案者およびその支持者の原著書、文献等を列記し、そのうちのあるものは常々効果的に引用され、読者に親切に整理されている。また、書物の末尾に二段抜き五頁に亘り索引が用意されている。

著者がとりあげている学説は十二で次の如きものである。

一、形式訓練説（The Formal-Discipline Theory）
二、自然完成説（The Natural-perfection Theory）
三、知覚説（The Apperception Theory）